

山田貴文 学位（博士）論文審査報告書

論文題目：古代歌謡引用論—物語における催馬楽表現史—

物語文学においては、和歌をはじめとした先行文学作品の引用が物語世界を豊かにし、描かれた場面に広がりを与えてゆく。そうした引用のなかで、古代歌謡の担う役割の究明を目指す山田貴文氏は、学位請求論文において、「催馬楽」と呼ばれる歌謡を取りあげ、『源氏物語』を中心とした平安時代物語文学における、歌謡の引用とは何かという課題に果敢に取り組んだ。「催馬楽」という歌謡は、もとは民間で歌われていたと考えられる古代の歌謡で、和歌などに比べると俗的な性格が濃厚に認められるが、いつの頃からか貴族社会のなかでも歌われるようになり、伝承する家が固定するなど宮廷歌謡としての位置を揺るぎなくする一方で、物語文学を彩る表現として利用された。

「催馬楽」自体の解釈についてはすでにさまざまなかたちで研究され論じられているが、「催馬楽」という名称をはじめ、それぞれの歌のこぼや性格にも不明な部分が多く残されている。したがって、物語中に引かれた「催馬楽」を考えるには、まずはその句が「催馬楽」の引用であると判定し、その上で歌謡の解釈をおこなっていかなる内容の歌謡であるかを検証した上で、物語中に当該歌謡が引用されることによって、描き出された場面はどのように読めるかということを考えるという手順を経ることで、はじめてそれが物語世界にいかなる深まりと豊饒さを与えることになったかということ論じることができるのである。そのためには、物語文学に基軸を置きながら、そこから前後の時代へと逸脱し、言語的経験として物語が人々の心に生き続ける動態や、それらの作品を成り立たせる諸条件を歌謡表現もしくは音楽表現の中から分析するなど、いくつものやっかいな問題を明らかにすることによって、物語文学における「催馬楽」引用を論じることが可能になる。

そうした困難をともなう本研究は、以下のような構成で展開する。

第一章は、物語における音楽表現との関係を考察する前提として、古代日本における音楽はどのような状況にあったかということ整理する。まず、古代中国から日本への音楽の伝来の流れのなかで、唐楽から雅楽へという音楽受容のさまを説き、受容の後に雅楽がいかなる展開を遂げたかを確認した上で、雅楽が物語においてどのように記述され、それが物語の場面にいかなる影響を与えているかをみる。たとえば、『源氏物語』の舞楽場面に焦点を当てると、描かれた舞楽が、たんに一場面としてあるのではなく登場人物の立場を明確に位置づけるという役割をもたせて描いていることが明らかになるのである。

第二章は、「催馬楽」がどのような歌謡であるかを論じる。まずその歴史を確認し、そこからもともと「催馬楽」が背後にもつと考えられる歌垣という場における歌謡やその背景

を考察し、踏歌という舞踏が「催馬楽」に関係のある行事であることを確認する。そこでは、古代日本の歌垣と中国伝来の踏歌との融合が確認され、日本の雅楽の成り立ちを見通す。さらに、雅楽としての「催馬楽」が唐楽の曲をもつ歌謡であること、儀式ないし行事における「催馬楽」のあり方、宴会での歌謡の存在意義などを論じる。その上で、歌謡としての「催馬楽」がどのように物語に登場し、表現としていかに引用されているかを、「催馬楽」「此殿」を事例としていくつかの物語作品での描かれ方を比較しながら、「催馬楽」の歌詞を利用することで場面情景を強調し、登場人物の立場、場面空間における建築物の見事さや距離感などを描写するのにも「催馬楽」の歌詞が大きく寄与していることを明らかにする。

第三章は、「催馬楽」の諸注釈を比較しながら、歌謡の性格および歌詞から解釈できる歌の意味を論じる。「催馬楽」の注釈書および楽譜について解説し、「催馬楽」を伝承する二系統の家（源氏と藤原氏）の伝承や系図を確認する。そして、律と呂に分けられた「催馬楽」の各歌を、諸注釈による歌詞を詳細に検討するという一首一首の注釈作業を行った上で、律と呂との区分については、中国と日本の音階の違いによるものではないかという可能性を示唆する。

第四章は、『源氏物語』以前の「催馬楽」記載表現を確認するために、『うつほ物語』における「催馬楽」の事例を取りあげて論じる。『うつほ物語』には、「こはふり」という和歌を「催馬楽」のリズムでうたう表現が確認でき、そこから、個人個人の声を誰の声であるかを特定し、そこに込められている情報を意識的に強調したい場面で「催馬楽」が使われていることを指摘する。さらに「催馬楽」を選択することで、その情景のなかで歌う人物の立ち位置を暗に示すという物語的な効果をもつことも指摘する。次に『枕草子』に記載された「催馬楽」について考察を行い、『枕草子』の写本によって「催馬楽」という語が登場するものとし、ないものがあると指摘し、そこから、「催馬楽」の語が存する本文の新しさを見だし、それが『枕草子』本文の新旧の判断の一基準になるのではないかという可能性を示した。また、『続日本記』に童謡（わざうた）として記載される歌謡と「催馬楽」「葛城」とがほぼ同じ歌であるため、『続日本記』と「催馬楽」「葛城」とさらに『日本霊異記』に収める類似歌謡の比較を行い、どちらも「催馬楽」から発して、『続日本記』の歌は人物を意識しての歌、『日本霊異記』の歌は天皇が天の下を治めることの表相として囃子言葉を意識的に歌った歌であると解釈する。そして、「催馬楽」全体を見渡すと政治色などみられない民衆の歌のようにみえるが、いくつかの歌においては、「貴族政治の直接書くことの出来なかった歴史を記録として残すためという性格」をもっていたかもしれないという興味深い指摘がなされる。

第五章は、『源氏物語』においてどのように「催馬楽」が組み入れられ使われているかをみることで、そこでの効果として、物語空間にどのようなかたちで影響がみられるかを検証する。本論文の中心をなすといつてよい章段である。『源氏物語』では、「催馬楽」自体がその場面でその場の風景にとけ込むようにただ登場しているのではない。描かれている巻の中で生じる事件や出来事を、「催馬楽」をみるだけでも解るかたちで「催馬楽」の歌詞を利用し、その巻での事件を掘り起こし、表面化させ、その巻で伝えたいことを改めて示すことで、巻の中の空間を「催馬楽」という道具を使ってまとめているということができると山田氏は指摘する。そこに『源氏物語』の物語としての質の高さが示されてもいるということができるのである。また、死の直後の内容が含まれる巻に「催馬楽」が登場することを指摘し、そのようにして「催馬楽」が登場している巻を経た後に、主人公たちが新たな力を得ている可能性があるという、ある種の法則性を山田氏が見いだしていることも重要な指摘だとみなしてよいだろう。

つまり、『源氏物語』にとって「催馬楽」とは、その歌詞に込められた物語を使い、物語において直接語ることのできない問題、つまりタブーとなる事象をもっとも短いかたちで読者に示す道具として「催馬楽」は存在する。また一方で、「催馬楽」が歌垣から発生したという出自に由来すると思われる役割として、恋愛という空間を構成させる力があり、そうした意図のもとに「催馬楽」が詠われ、その周辺で和歌による問答が行われることで、新たな恋愛を生み出す場を構成するという役割を「催馬楽」は担わされている。こうした点が、『源氏物語』における「催馬楽」引用の大きな特徴であるということか明らかにされ、それによって、『源氏物語』が物語文学のなかでも、ことに優れた文学作品であることを如実に示しているということができるのである。

第六章は、『源氏物語』以後の「催馬楽」引用を確認するために、『狭衣物語』の記載例を確認する。『狭衣物語』では、「催馬楽」の歌曲名をとって「飛鳥井の女君」という名を登場させている。しかも、名前を引用しただけではなく、その人物像を名の由来となった「催馬楽」の歌詞からから連想させ、それを物語上に浮かび上がらせることでその歌詞や語から連想することができるかたちで物語を展開させている。このように、登場人物に「催馬楽」の歌詞が抱える物語を背負わせたことが『狭衣物語』の新しさであり独自性である。次に『浜松中納言物語』と『夜の寝覚』の「催馬楽」記載例を確認する。そして、『浜松中納言物語』では物語展開を想像させる予言歌としての新たな解釈を提示し、「催馬楽」という日本の歌詞を持ちつつ唐楽の曲を持つという性格が物語の登場人物の立場を説明するという従来の解釈を確認する。また『夜の寝覚』は、「催馬楽」の歌詞が記載表現として歌から離れ、殿誉めの語として変化していく様子が確認でき、また「あげまき」という語には

「催馬楽」の歌曲名に歌詞から連想される新たな意味づけがなされていることなども指摘する。そして、物語において登場人物が受け取る物語上の意味とともに、読み手に対して与えられた情報、予告や予言のような意味があるという解釈を可能にし、そうした予言として「催馬楽」がうたわれていると指摘する。続いて『とりかへばや物語』の「催馬楽」記載表現では、「催馬楽」の選択が物語文学史の中で固定化していたことが確認できるとし、「催馬楽」が、物語の解説的な役割を強くもっていると述べる。『とりかへばや物語』では、男が女になり、女が男になるという男女が交互に入れ替わり物語を進めていくが、その場面の主体が男として描かれているか女として描写されているかという理解が難しいため、状況説明を容易にする役割をもたせるために「催馬楽」が選択され記載されていたと指摘する。

以上、山田貴文氏は、物語文学に引用された「催馬楽」の性格をさまざまに見いだしてゆく。そして、平安物語文学における古代歌謡表現の引用とは何かを「催馬楽」記載の事例から考察した結論として指摘するのは、「催馬楽」には物語で繰り返し引用されることで歴史性を身に付け、そこから物語を裏から解説する歌として、さらには、物語の流れにおいて予言をおこなう童謡（わざうた）としての役割を担っていくというあり方であった。従来、「催馬楽」の引用については、歌詞から連想される意味だけで考察がなされてきたのだが、そこに童謡のような物語の解説や予言という要素を組み込むことで、物語に引用された「催馬楽」の意味や性格を新たなかたちで解釈することが可能になったということである。これは、本論文の大きな成果であるということかできるだろう。

以上述べてきたところから、本論文が博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格があると認められる次第である。

平成28年1月30日

主査 立正大学大学院文学研究科国文学専攻

教授 三浦 佑之

副査 立正大学大学院文学研究科国文学専攻

教授 岡田 袈裟男

副査 東京大学名誉教授（立正大学元教授）

藤井 貞和